

# 戦争と平和を 考える

第1回

9月30日[土]

開講式 12:50~13:00

- 13:00~14:50「福祉国家と軍事国家」高橋 弦(経済政策論)
- 15:00~16:50「戦争と子ども・障害者」土岐邦彦(発達心理学)

第2回

10月7日[土]

- 13:00~14:50「戦争報道と情報操作」野原 仁(ジャーナリズム論)
- 15:00~16:50「近代日本の戦争と文明評論」林 正子(日本近代文学)

第3回

10月14日[土]

- 13:00~14:50「日本国憲法とニュージーランド憲法における反核平和」近藤 真(憲法論)
- 15:00~16:50「戦争と医学」粕谷志郎(環境医学)

第4回

10月21日[土]

閉講式 16:10~16:50

- 13:00~14:30「戦争をなくすための平和教育」近藤真庸(健康教育論)
- 14:40~16:10「平和とは何か? ——  
ガルトゥングの積極的平和論」吉田千秋(価値哲学)

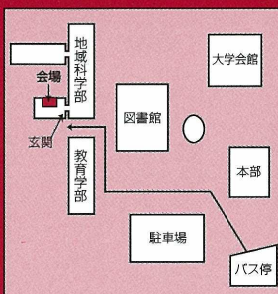
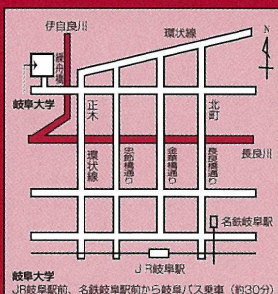
●会 場 岐阜大学地域科学部 (岐阜市柳戸1番1) 1階 地101教室

●受講対象者 関心のある方なら、どなたでも受講できます。

●定 員 50名 (定員を超えたときは、お断りすることがあります)

●受講料 7,200円 (納入後の受講料はお返しできません)

●その他 3回以上受講された方には修了証書(岐阜大学)を授与します。



●申込み方法 受講を希望される方は、「住所・氏名・年齢・電話番号」を明記の上、郵送・持参・FAX・E-mailのいずれかの方法により、下記へお申込みください。受講料納入方法(銀行振込)については、お申込みいただいた後にご連絡いたします。

ご連絡いただいた皆様情報は、公開講座の目的に必要な範囲内において使用致します。ご自身の個人情報の開示・訂正・削除を希望される場合には、下記にご連絡下さい。

●申込み期限 9月20日(水)

●申込み先・問合せ先 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1  
岐阜大学地域科学部総務係  
TEL : 058-293-3003  
FAX : 058-293-3008  
E-mail : chiiki@cc.gifu-u.ac.jp

## 第1回 9月30日(土) 開講式12:50~13:00

13:00~14:50

### 「福祉国家と軍事国家」

高橋 弦

言葉のイメージからすればまったく逆の意味になるが、事実においては現代の福祉国家はおしなべて軍事国家にはかならない。程度の差こそあれ、先進国と呼ばれる国々は財政支出に占めるウェイトでいえば、最大項目が社会保障費であり、ついで軍事費というのが一般的であろう。歴史的には軍事国家の内政的基盤を整える手段として社会保障の充実が図られたとあってよい。年金や健康保険などを例にとっても戦時中に起源を有する制度が多いのである。これをたんに偶然と片付けてよいわけがない。セーフティネットが張り巡らされた社会は、格差が当然という社会に比べたら暮らしやすい。そのことが政府に対する国民的支持をより確かなものにし、ナショナリズムを強固にしてきた。21世紀福祉社会建設は、福祉と軍事の内的連鎖をどのようにして断ち切ることができるのかという課題に答えるとき、初めて現実的有効性を主張しうるだろう。

## 第2回 10月7日(土)

13:00~14:50

### 「戦争報道と情報操作」

野原 仁

情報操作を「何らかの目的を達成するために、意図的に情報を歪曲・ねつ造・隠蔽すること」と定義するならば、私たちの日常生活のあらゆる場面で、何らかの形の情報操作が行われている。そして、この操作が最も大規模かつ頻繁に行われるのは戦争時である。なぜならば現代の戦争は、軍事力だけでなく国家全体の人員・物質・思想・情報などすべての資源を用いる総力戦であり、操作にも平時とは比較にならない資源が費やされるからである。また、複雑化した国際社会の中では、単に自国民による戦争遂行支持を目的とした操作だけではなく、敵国政府や敵国民ならびに国際社会に対する操作も必要だからである。本講義では、情報操作に関する基礎的な知識を学んだ上で、現代の戦争報道の特徴ならびに情報操作の実態を具体的に検討するとともに、平和な社会の維持のために情報をきちんと読み解くことがいかに重要かを訴えていきたい。

## 第3回 10月14日(土)

13:00~14:50

### 「日本国憲法とニュージーランド憲法における反核平和」

近藤 真

ヒロシマ、ナガサキ以来の現代において戦争と平和について考えるとき、核戦争をどのように避け、いかにして核戦争による全滅から人類と地球の全ての生命を救い出すかにこそ、最も重要で本質的な課題があることは明らかであろう。日本国憲法第9条の戦争放棄は、この核戦争による全滅から人類を救う課題に真に答えるものである。日本国憲法9条に未来への希望を見出した世界の反核平和運動の指導者たちは、1999年にオランダのハーグの世界平和市民会議において、日本国憲法第9条を各国が法律として制定せよと呼びかけた。しかし、「憲法9条が邪魔だ」と言うアメリカに従って、日本国民がこの世界の希望を捨ててしまうのではないかと、世界はいま非常に心配している。その中で、反核平和主義のニュージーランドこそは、1987年に非核法を制定し、1999年には戦闘機を放棄し、日本国憲法9条の精神を受け継ごうとしている。

## 第4回 10月21日(土) 開講式16:10~16:50

13:00~14:30

### 「戦争をなくすための平和教育」

近藤 真庸

21世紀を「平和の世紀」にしたいと、誰もが願っていることでしょう。平和な社会を築くために、地域で、子どもや青年、周りの人たちと平和について学びあいたい、と考えている人も少なくないはずですが。しかし、「9.11」で幕を開けることになった21世紀。絶望を希望に変える、自分に何ができるか、どうすればよいのか、その方向性も方法も見つかれないまま、逡巡しているのが現状のようです。一昨年の夏、私は地域科学部の学生と音楽朗読劇『戦争のつくり方』（リボンプロジェクト）を企画・上演しました。そういった経験を、そこに参加した学生の「生の声」や「実演」をまじえながら紹介するとともに、日本におけるこうした「草の根の取り組み」が、いま地球的な規模で進められている「戦争をなくすための平和教育」に、どのような意味で貢献することになるのかを、受講生のみなさんと一緒に考えていきます。

15:00~16:50

### 「戦争と子ども・障害者」

土岐 邦彦

直接戦地に赴いたわけではないけれど、いわゆる戦後の生活の中で、子どもと障害者は過酷な状況を強いられていた。たとえば、学童疎開を体験した子ども、そして「非国民」「穀潰し」と扱われた障害者が手記としてそのころの辛い体験を残している。本講義では、そのような手記から子ども・障害者が戦争時にどのような状況に置かれ、どのような心境であったかを探ることを一つの目的にする。また、子ども・障害者の発達に戦争によってどのように阻害されてきたか、そして戦後の教育によってどのように発達が保障されてきたかを、具体的事実を持って明らかにしていくつもりである。そして、昨今の子ども・障害者をとりまく行政施策（たとえば、教育基本法改正の動き、特別支援教育の実施、障害者自立支援法の施行等）が子ども・障害者をどのようにとらえているかをおさえながら、それを戦争を準備していた時期の特徴とかさねて考えてみようと思う。

15:00~16:50

### 「近代日本の戦争と文明評論」

林 正子

西洋列強との不平等条約に拘束されていた近代日本は、日清戦争・北清事変・日露戦争を経て、一躍、台湾・サハリン（樺太）南部・朝鮮などを植民地とし、中国東北地域（満洲）南部を勢力範囲とする「大日本帝国」を標榜するに至った。その時代は、明治の幕開けと対比される時、近代化に多大の成果を挙げた栄光の時代、国際的な地位を一挙に向上させた飛躍の時代と見なされがちであるが、実際には、その「大日本帝国」の権力拡大志向が、第一次世界大戦・満洲事変・十五年戦争・第二次世界大戦というその後の戦争の行程を紡ぎ出していったのであり、現代日本が、とくにアジアの近隣諸国との間に抱える種々の歴史的課題の淵源を、当時の日本人の精神性や意識構造に求めないわけにはゆかない。本講義では、地球規模で幸福が希求される現代において、近代日本の文明評論を読解することで、「戦争の世紀」の実態を学び、「平和の世紀」を実現する方途を模索したい。

15:00~16:50

### 「戦争と医学」

粕谷 志郎

戦争と平和を考える上で、医学・医療は重要な視点を提供してくれる。戦争のためには、感染症などの医学知識が、生物・化学兵器へと応用される。日本軍の731部隊は、バクテリアを持ってノミを中国各地でばらまいた。ナチスは、費用のかからない大量殺戮方法を見いだした。一方、戦争は感染症の蔓延を引き起こす舞台を提供する。世界で4千万人の命を奪ったスペイン風邪は、まさに、第一次世界大戦が引き起こしたもう一つの悲劇である。スペイン風邪の時もそうであったが、感染症は兵員にも容赦なく襲いかかる。三十万の兵を率いたナポレオンのモスクワ攻めでは、発疹チフスで大半の兵が失われている。ナイチンゲールを生んだクリミア戦争でも、戦闘による死者をはるかに上回る病死者を出している。戦争が医学を動員する様、戦争が社会と環境を破壊して感染症の巣窟とする様、これらを通して、人間の為せる最悪の行為、「戦争」を見てゆきたい。

14:40~16:10

### 「平和とは何か？——ガルトウングの積極的平和論」

吉田 千秋

人間の歴史の中で、ある時点から戦争が絶え間なく起こり、人々を苦しめてきました。だから、人々は、戦争がない世の中を心の底から願い、その状態を平和と考えてきました。しかし、殺し合う戦闘行為が現にない、という状態だけが平和といえるのでしょうか。この問いに対して、世界大戦後にヨハン・ガルトウングは、大規模に存在する飢餓・貧困、過酷な差別・不平等などの構造的暴力に着目し、これが軽減しないと根絶されなければ本当の平和とはいえない、としました。彼はこの意味での平和を「積極的平和」と位置づけ、たんに戦争がない状態という「消極的平和」と対比して展開しました。この平和論は「防衛のための」軍隊組織の保持や戦争準備態勢を斥けるだけでなく、戦争を起こさせる基盤にまで目を向けさせるもので、平和とは何かを考えるための貴重な指針になると考えられます。